

## 『女性の虐待あるいはマライア』に見る娘への教え

末 森 恵 子

Addressing these memoirs to you, my child, uncertain whether I shall ever have an opportunity of instructing you, many observations will probably flow from my heart, which only a mother—a mother schooled in misery, could make. (124)

これはメアリ・ウルストンクラフトの『女性の虐待あるいはマライア』（以下『女性の虐待』）において、ヒロインであるマライアが引き離された娘に宛てて書いた、回想録の書き出しである。この回想録は未完の小説全十七章のうち実に七～十四章を占めるものであり、女性としての自分の受難がいかんして引き起こされたか、それに自分がどのように向き合ってきたかが、“the sentiments that experience and more matured reason, would naturally suggest” (82) をもったのちのマライアにより語られている。作品の目的とも深く関わってくる、主要な部分である。

この小説の目的は、“Author’s Preface”によると exhibiting the misery and oppression, peculiar to women, that arise out of the partial laws and customs of society” (73) である。回想録は小説の目的となっている「女性の受難を示す」ことをとおして、娘を教育するために書かれたものである。ウルストンクラフトの著作は多くが女性教育に関わるものであるから、教育は生涯を通じての彼女のテーマだったといえるだろう。この作品についての、「マライアは精神の強さをもっており、体験と内省によって成長するヒロインである。彼女は自己教育をするのである。その意味でこの小説は、公教育とはまた違ったウルストンクラフトの教育論でもある」（安達 206）という見方が示すように、『女性の虐待』も彼女の作品の流れを受けて、女性教育のテ

ーマと切り離せない作品になっているのである。

『女性の虐待』に特徴的なのは母性崇拜と女性の法的・精神的独立への姿勢だが、それらは以下のように『女性の権利の擁護』に辿ることができる。“To be a good mother—a woman must have sense, and that independence of mind which few women possess who are taught to depend entirely on their husbands.” (*A Vindication of the Rights of Woman* 152) 同書において女性は娘、妻、母という伝統的な性役割に基づいて論じられていたが、そういったものは『女性の虐待』においても作品中に大きな意味づけをしているように思われる。また、Ashley Tauchertが “Wrongs of Woman records a narrative of the emergence of Matrilineal writing from patriarchy” (Tauchert 118) として、これが前作『スカンジナビアからの手紙』を汲むウルストンクラフトの「母系のライティング」だと述べているように、『女性の虐待』は改めて女性性と関わってくる作品なのである。ウルストンクラフトはこのような女性に付随する問題をどのように捉え、我々読者に何を教えようとしたのだろうか。

物語が教訓性をもつときには、その教訓は主人公の運命によって大きく変わってくることになるだろう。だが『女性の虐待』にはここに一つの問題がある。『女性の虐待』は未完であり、結末についての断定がないのである。したがって我々は、残されたいくつかのメモと断片的な文章を手がかりにして、未完の結末を考慮に入れなければならない。ウルストンクラフトの構想は二種類ある。短文で書かれたメモの方に共通していると思われるのは、「マライアは離婚<sup>1</sup>をかなえるが、ダンフォードとの関係はうまくいかず失望に終わる」という筋書きである。その中の一つを取り上げれば、“Divorced by her husband—Her lover unfaithful—Pregnancy—Miscarriage—Suicide” (202) というもの。一方で断片的だが文章になっている方は、「自殺から救われたマライアが実は生きていた子供と再会する」という、希望の見えるものになっている。このようにそれぞれ「失望の結末」と「希望の結末」とでもいえるような構想を、ウルストンクラフトは両方抱えていたのである。ほとんど正

反対の結末を可能性として含む『女性の虐待』、そのテキストが掲げる「娘への教え」はいかなるものになるのか、マライアの直接の教えを表す回想録と、物語に描かれる女性性についての各問題を検証しながら迫っていききたい。

### (一) 娘への回想録

最初に、マライアが娘に宛てた回想録がどのように伝わっていくかを追いながら、彼女の教えが向かう方向性と運命について考察しよう。マライアが書いた回想録は、書き出しを先に示したとおり娘への手紙といえるものだが、それに対しての娘の返事は存在しない。受取人の娘は物語ではほとんど不在であり自らを語ることもないので、回想録は小説中で肝心の娘には届かないのである。しかし娘は単に不在だとされるのではなく、その生と死によって回想録を翻弄しまた翻弄される密着性をもっていることを見逃してはならない。

まずこの回想録が生まれたときには娘の生死は不明であり、マライアはただ生存の希望にすぎない状況の中で、これを書き始めている。そして出来上がった回想録が初めてダンフォードやジェマイマに公開されるのは、彼女が娘の死の知らせを聞いた後である。回想録は受取人を失って友人たちのもとに辿り着いたのであり、ここで本来の受取人とは異なる受取人（読み手）をもつことになる。またマライアはその回想録を、“Death may snatch me from you, before you can weigh my advice, or enter into my reasoning” (124) という箇所から分かるように、先に死ぬかもしれない母親から生き残るべき娘へ送るものだと想定していた。ところが実際は娘が死んでしまったことで立場が逆転し、回想録はそこで受取人と目的を両方失ってしまったのである。その後、この回想録の存在は物語の中に出てくることはない。もしかしたらマライアが悲しみの中で、捨ててしまったかもしれないし、突如起きた精神病院の混乱とそれに続く逃亡の中で、失われた可能性だってある。受取人を失った回想録はどこに行ってしまったのか、我々には分からなくなる。

だが、この回想録は結末によっては辿る運命が異なってくる可能性がある。というのも二種類ある結末のどちらを採るかによって、回想録が書かれた／読まれた時点での、娘の生死が変わってくるからである。娘が実は生きていたことになる「希望の結末」では、娘の死という悲劇的状况から逆転して、一度は消えてしまった？回想録が復活する可能性があるのだ。たとえ現物が残っていなくても、マライアとジェマイマという二人の母親のもとで育てられるならば、回想録を書いた本人とそれを読んだ友人から、娘は十二分にその教えを与えられることになる。そうして再び受取人と目的を得た回想録は、その存在意義を復活させるばかりか、さらに拡大していく余地さえ残しているのではないだろうか。このように、回想録は娘と常に運命を共にするのである。だが回想録の宛先を娘だけに限ってしまえば、このテキストの目的からは遠ざかっていくことになるだろう。

何より回想録は、手元を離れたときでも、書いた本人と切り離すことはできない。“He [Darnford] ... so earnestly intreated to be allowed ... to beguile the tedious moments of absence, by dwelling on the events of her past life” (123) という、ダンフォードの回想録を求めての懇願を見るまでもなく、マライアの回想録は娘への教訓であると同時に、マライア自身を語る存在である。これが letter ではなく memoir だと呼ばれていることにも、自分自身に宛てて書かれたという意味が窺えるが、実際これはマライアが監禁生活の中で、自分と向き合うために書き始めたものだったようである。孤独な状況の中、マライアは書く作業を通じて、過去の自分と対話することを発見する。その時点ではむしろ、人に伝えることよりも、書くという行為自体が目的であるように思われる。それによって “She lived again in the revived emotions of youth, and forgot her present in the retrospect of sorrows that had assumed an unalterable character” (82) というように、マライアは慰めを見出しているのであるから。

そして娘という受取人を失ったとき回想録が返ってくるのも、誰よりも本人の元であろう。ダンフォードが読んだ後回想録はすぐにマライアに返って

おり(187)、その後で約束どおりにジェマイマに渡ったとしても、やはり最後にはマライアに返ることになるだろう。回想録が生まれた場所に再び戻ってくるように、マライアが娘へ向けて書いた教えは再びマライアに帰ってきて、胸の内に過去の教訓を留めおかせるのである。教育というものは他者にだけでなく、自らにも向かうものでなくてはならないはずだ。よって回想録は娘が失われてからそのままどこかへ消えてしまったのではなく、彼女の思想に内面化されて残ったのだと考えるのが自然ではないだろうか。マライアのその後待ち受ける闘い——すなわち夫が、マライアとダンフォードの関係を姦通だとして起こした訴訟——のためにマライアが書いた文は、“Married when scarcely able to distinguish the nature of the engagement, I yet submitted to the rigid laws which enslave women, and obeyed the man whom I could no longer love” (195) というように、回想録をさらに整理して主張を強めたものになっている。そしてここでの彼女の文の受取人は、以前の友人たちの範囲からさらに広がって、法廷という公的な存在へと変わっているのである。

回想録は、『女性の虐待』という作品と同様、やはり個人的なものにとどまらない大きな流れの中に存在している。挿話という形でほかの人物の語りの中に位置づけられていることも、それを表している。一連の挿話はダンフォードの身の上話から始まって、ジェマイマが続き、マライアの回想録へと導かれる。ダンフォードの挿話は私的な短いもので、一連の挿話の口火としての意味以上の、また後の女性たちの話と対照させること以上のつながりを見出すのは難しい。だが続くジェマイマの話はダンフォードのものより圧倒的に長くなり、しかも “the story she [Maria] had just heard made her thoughts take a wider range.... Thinking of Jemima’s peculiar fate and her own, she was led to consider the oppressed state of women, and to lament that she had given birth to a daughter” (120) というように、マライアの思いを一人の女性の苦難から、社会的な女性の抑圧状態までに広げる働きをする。そうして現れるマライアの回想録だが、その文中にもさらに逃

亡の中で出会う下層階級の女性たちの語りが入っていることは、多くの批評家によって注目される所である。ダンフォードを除くこれら一連の挿話は、女性の受難を語っていることで共通しているが、このような挿話のつながりは女性同士の連帯を予感させるものでもある。その中にある限り、マライアの回想録はたとえ受取人がなくとも、孤独なものではない<sup>2</sup>。

また娘に教えを与えるための回想録の内容も、面白いことに個人的な問題からしばしば飛躍して、女性一般の苦境に言及している（それはときに話の筋からの脱線を引き起こす）。

But I lost all patience—and execrate the injustice of the world—folly! ignorance!—I should rather call it ... But, born a woman—and born to suffer, in endeavouring to repress my own emotions, I feel more acutely the various ills my sex are fated to bear—I feel that the evils they are subject to endure, degrade them so far below their oppressors, as almost to justify their tyranny; leading at the same time superficial reasoners to term that weakness the cause, which is only the consequence of short-sighted despotism. (181)

このとき回想録の受取人は、自分の娘という私的な一個人の枠を超えて、女性全体を指名するのである。したがって回想録すなわちマライアの教えの受取人は娘だけでなく、マライア自身であり、友人たちであり、読者をも含めた女性全体にまで広がっていくのだといえよう。読者はそこで、“a reading that puts the feminist reader’s own position as reader on the line” (Jacobus 292) という読みの可能性を体験することで、ウルストンクラフトの教えを受け取るのである。

## (二) 『女性の虐待』に見られる母

こうして女性たちのつながりの中で『女性の虐待』の教えを捉えたとき、我々は母から娘へ向かう力を、女性たち全体へと向かう力の中心に見出すのである。だが娘からの手紙の返事が存在しないように、その一方で娘から母

への視点がないこと、またマライアが自身を娘として母を見るということが極めて少ないということにも気づく。母から娘へは強い教育という作用があるが、娘が実際に母の教えを受け入れるのか、そして母の運命を逃れることができるのかについては描かれていないのだ。

これは著者と作品の性格として、避けがたい傾向ではある。ウルストンクラフトの著作はいずれも、教育書や小説など形態は異なっても、基本的には先駆者的な立場から女性を導こうとするものである。特に『女性の虐待』は指導者の役割を「母親」に置く小説なので、このような作用が見られるのだといえる。同時代のオースティンや後のヴィクトリア朝の小説などでは、娘の立場からの物語が一般的だったといわれているので<sup>3</sup>、『女性の虐待』は「母からの物語」としても興味深い作品であるだろう。

しかしマライアを「母」としてでなく「娘」として捉えた場合、『女性の虐待』にも「娘から見た母」が、母娘物語の伝統的な形で見られるのである。マライアの母についてはあまり多く言及されないが、数少ない記述の中でも、彼女の人物はよくわかるようになっている。“My mother had an indolence of character, which prevented her from paying much attention to our education” (126) と語られるマライアの母は、横暴な夫に耐え忍ぶことしかできない悲しくも愚かな、だが通俗的であった女性像をまとして登場する。家父長制に懐柔されているので、彼女は娘をなおざりにして長男だけをえこひいきしたり、娘だけに女としての我慢を説いたりする。その結果現れてくるのは、父親や息子と共に「娘を抑圧する母」の構図であり、共同体としての母と娘はそこで断絶されている。そして母娘間の断絶は当然マライアを、ほかの「娘の物語」のように、男性側（ただし、実父ではなく叔父）へと向かわせるのである。娘との絆を重要視するマライアにとっては、母親は乗り越えるべき女性のステレオタイプだったといえるだろう。

このような描写はウルストンクラフト自身の母親をモデルとするものであり、他の小説にも顔を出すなど、彼女の抱く母親像に多大な影響を及ぼしている<sup>4</sup>。さらにそれはのちの『女性の権利の擁護』で批判された母親像にも当

てはまるもので<sup>5</sup>、彼女が社会悪として認識していた女性の墮落状態であったことが分かる。ゆえにこれは意図的に、問題意識をもって提示された母親像であると考えられる。

それは母親が娘に及ぼす悪影響と、そこから脱け出す娘を描くためであろう。マライアの母が示した最大の意思表示は、皮肉にも“A little patience, and all will be over!” (136) という、ウルストンクラフトの母が言ったとされる最期の言葉であった。それに応じるようにマライアが叫び続けてきたという“A little more patience, and I too shall be at rest!” (136) という台詞は、娘が母から受け継いだ負の遺産であるといえる。そして二種類ある結末の両方でマライアの自殺行為は起こってしまい、死の誘惑がマライアに宿命的にとりついていていたことを明らかにする。それは母親による心中への誘いといってもよいかもしれない。母が結果的にマライアを死の方向へと向かわせるように、マライアもまた“Surely it is better to die with me, than to enter on life without a mother’s care!” (202) と、お腹に宿っていた子を道連れにして死のうとする。これは娘が母親の運命を反復してしまう危険を最も劇的に表している場面である。

“Have a little patience,” said Maria, holding her swimming head (she thought of her mother), “this cannot last long; and what is a little bodily pain to the pangs I have endured?” (203)

マライアが自殺した場合、ウルストンクラフトの「不公平な法や社会の習慣から生じる、女性に特有の苦難や抑圧を示す」という目的にとっては効果的な演出になろうし、それは『女性の虐待』と名付けられた小説の結末としても確かに適うものであるだろう。だが、女性の苦難を示すだけにとどまれば、結局はマライアの母が娘にしたことと変わらないのではないか？ 悲惨な生涯の中で、死だけが唯一の救いであるという女性の境遇を、認めてしまうことになるのではないだろうか？



### (三) 復活への可能性

その疑問を払拭してくれるのが、「希望の結末」なのである。そこにおける先ほどの自殺行為の続きを見ると、やはり「母親的」な著者ウルストンクラフトは苦難の提示から一歩進んで、救済への具体案を提供せずにはいられなかったように思われる。抑圧に対しての抵抗を知らなく、社会的手段も与えられていない女性たちを導くには、救いにつながる道を開拓することが必要であると感じていたのだろうか。その瞬間は劇的に訪れる。“A new vision swam before her. Jemima seemed to enter—leading a little creature, that, with tottering footsteps, approached the bed. . . ‘Behold your child!’” (203) そうしてこの結末は、マライアの自殺未遂から復活への筋書きをとるばかりか、希望と人生の目的を取り戻して「救いの可能性」を示すことになるのである。それによってようやく、母親の運命を繰り返す危険から娘は逃れることができる。

さらにこれは、娘としてのマライアの自殺未遂からの復活であるのと同時に、マライアの娘の復活でもある。物語の早いうちに死亡したとされ、その時点で声を絶たれていたマライアの娘の運命をも、こうして「希望の結末」はひっくり返す。そこで発せられる娘の“Mamma!” (203) という台詞は、マライアを母親として蘇らせる奇跡的な力をもっているのと同様、娘自身の復活の宣言でもあったのである。

それに呼応するように“‘The conflict is over! — I will live for my child!’” (203) と叫ぶマライアは、第一巻の終わりを締めくくった、回想録の次の言葉に対する回答を見つけたように見える。

“These varying emotions will not allow me to proceed. I heave sigh after sigh; yet my heart is still oppressed. For what am I reserved? Why was I not born a man, or why was I born at all?” (139)

様々な苦難を経験した後で、子供という人生の目的を再び得たマライアは、

女性として生まれたことの意味を「母親であること」に見出したのである<sup>6</sup>。ウルストンクラフトは、マライアの女としての存在意義への疑問——女性たちが皆抱いたかもしれないその疑問——に、ここで一つの回答を与えているのだ。

それはまさに、娘と同じく絶えず失われ、取り戻そうとされる存在であった「母」の復活である。この結末は母親から十分な愛情を受けられず、また自らも母親になることを阻まれた女性に「母」の幸福を取り戻させる。だがそれはマライアのことだけではなく、私生児でありまた不幸な妊娠中絶で自らも母親になれなかったジェマイマのことでもある。そこで思い出されるのが、マライアが娘を助けてもらおうとジェマイマと交わした “I will teach her to consider you as her second mother, and herself as the prop of your age” (121) という約束、すなわちマライアとジェマイマが共に母親になって、娘を育てるという誓いであろう。ここで現れる「二人の母と娘」という構図こそが、ウルストンクラフトが見出した女性の救済についての結論を表すものなのである。

そこに存在するのは言葉をもった「母」であり、また優しく慰めるだけの家庭の天使像とは違うやり方で、娘と密接に関わる「母」である。天使のイメージから母親が脱け出すことは家父長制にとっては脅威となるだろう。だが離婚を叶えてジェマイマと娘と共に変則的な家族を形成する「希望の結末」においてはもちろんのこと、「失望の結末」においても離婚は叶えられており、いずれにしてもその脅威は生じている。ウルストンクラフトが問題とした不均衡な「家族」は、『女性の虐待』では必然的に崩壊させられるのである。さかのぼれば回想録の中で、マライアが夫の元から一人で逃げながら “I wished to be a father, as well as mother; and the double duty appeared to me to produce a proportionate increase of affection” (180) と感じていた時点で、すでに現実の父親の存在は消されていた。だが一人で母親にも父親にもなりたいと望んだマライアが選んだのは、シングルマザーになる道ではなく、相応しいパートナーと築き上げる道であった。すでに解体され始めて

いた家族は、離婚で完全に解体し、「希望の結末」において新たな形で再構築されたのである。

娘とジェマイマはマライアにとって共に生きる相手であり、その存在の有無は「希望の結末」と「失望の結末」を決定的に分かつ。ジェマイマは特にこの関係において能動的な働きをする点で、重要な人物である。Claudia L. Johnsonはこの二人の「母」の間にさらなる“the redemptive emergence of the mother-daughter relation” (205)を見出し、ジェマイマをマライアの母的存在に位置づけているが、確かにジェマイマはマライアにとってほとんど唯一の救い手であった。救い手となることを期待された男性が次々と脱落していく中、実際にマライアを精神病院から助け出し、赤ん坊を取り戻し、死ぬ瀬戸際の彼女を勇気付け、生きる希望を与えたのはジェマイマである。マライアの監視人として登場するジェマイマは、最初からマライアのただ一人の話し相手であり、外の世界に通じる唯一の希望でもあったのだが、この監視し保護するという役割もまた、ジェマイマを母親的な存在にしていた要因の一つだろう。

しかしながら二人は、身の上話や回想録の「語り」を交わし、感情を共有して助け合うという相互作用において、この小説に描かれた母娘関係を超越する。そして「希望の結末」においてジェマイマは、マライアの母親のような存在ではなく、同じ母親という立場になることが可能となる。そこには親子的な「保護」や、慰めあいとしての「友情」や、それ以外の無数の「ライバル」関係のどれとも異なる、女性同士の「連帯」の関係が生まれているのである。しばしば指摘されるように、この二人が階級を異にしていることが、階級間を超越する女性全体の横の広がりをもたらしめている。そしてその広がりをさらに、未来につながる存在である娘へと伝えることによって、縦糸の連帯の可能性が示唆されるのである。

連帯の網目の中では当然、平等な関係が目指されるべきであろう。「二人の母親と娘」という女系家族の構造は、夫ヴェナブルズや恋人ダンフォードの抑圧の代わりに、娘に対しては「教育」を、パートナーに対しては「助け合

い」を、新たな関係性としてもっているのだといえる。人間的愛情を基盤とした対等な相手としてのパートナーは、『女性の権利の擁護』において夫婦に求められた友情関係に近いものかもしれない<sup>7</sup>。だがウルストンクラフトは『女性の虐待』でそれを夫婦関係とは別次元のものとして、積極的に女性たちの中に見出していこうとしている。

その共同体にひそんでいるのは、マライアを「母親」というだけでなく、仲間の「女性」の一人として捉える視点である。女性の連帯に、娘との関係と同じように重要性を認めるマライアは、もはや「母親」だけにとどまっていない。連帯の中では「母親」や「娘」という、「他人」の女性との境界を作る記号は、それほどの意味をもたなくなってくるのである。しばしば女性全体の問題へと脱線するマライアの見解においても、実子とそれ以外の女性たちとの線引きはいくぶん曖昧であるといえる。娘の受難は女性たちの受難であり、その逆もまた然り——これは女性問題を論じるウルストンクラフトにとっては当然といえば当然の視点だろうが。「第二の母親」としてのジェマイマの存在などは、肉親と他人の境界線上にある、ウルストンクラフトが見出した新たな女性の位置を象徴するものではないだろうか。

これまで見てきたように、『女性の虐待』では母や娘といった性役割は、確かに母として／娘としての女性の自己を捉えるために必要だったが、それらはマライアが娘と母の両方の面を絶えず移ろうように、容易に変わり得る不安定なものであった。ゆえに女性を特定の役割に閉じ込めるような固定化はここでは無意味であり、多面性あるいは多様性が許容されるようになる。ここでは彼女たちが同じ「女」であることの方が、はるかに重要な意味をもつからである。全ての女性の性役割、ひいては階級などの差異を含めて彼女らを「女」という存在に還元することが、『女性の虐待』に見られる「連帯の可能性」をさぐる試みなのだといえよう。

ウルストンクラフトは、女性を分断する家父長制の構図の中で失われた「女性の連帯」を復活させることで、女性の価値を男性に代わりうる存在に高め、さらに男性との関わりにおいてのみ捉えられる束縛から、女性を解放

する道を示した。女性が「母親であること」に価値を見出して生きることを求めるのは『女性の権利の擁護』にも見られるが、女性同士の連帯によって彼女ら自身を救うという考えは、ウルストンクラフトの新たな思想となって、『女性の虐待』を『女性の権利の擁護』から発展させている。「希望の結末」はウルストンクラフトの、母と娘の関係を含む「女性の連帯」を取り戻す望みであり、挑戦であったといえる。マライアとジェマイマと娘が築く新しい家族は、ウルストンクラフトが人間同士の理想の関係を追及して生まれた新たな世界の縮図なのである。

こうしてウルストンクラフトが表明した教えは、マライアの回想録となってあちこちを渡りゆくと同時に、母や娘やそれ以外の女性の登場人物に投影されて小説の舞台をさまよひ、我々の元にたどり着いた。その道筋はさまざまな「女性の虐待」を経由するものであった。最初マライアの個人的なものから始まった小説の教えは、彼女が解放されていくにしたがって同志と力を得、社会との関わりを強め、さらに読者を巻き込んで拡大していったのである。そして回想録を媒介としてつながった「母と娘」は最小単位として女性の連帯を象徴していたが、それは閉じゆく関係ではなく、後々の規模の広がりを強く要求するものであった。『女性の虐待』における娘への教えは、そこに示される苦難を女性全体の問題として意識し対処するための、連帯の姿勢の重要性を訴えかけているように思われる。

(結末を除いては) 最終章となる第十七章には、ダンフォードを弁護するために書いたマライアの文が掲げられ、女性に対する不平等が社会的な問題として提起される。一人で法と社会に立ち向かって“the privilege of her nature” (195) を主張しようとするマライアの姿は崇高なものを感じさせるが、それでも “It is her duty to love and obey the man chosen by her parents and relations, who were qualified by their experience to judge better for her, than she could for herself” (199) と結論づけて女性を元の位置に閉じ込める旧弊な判事の前では、全く理解されない。女性がこのよう

に単独で戦うことの困難を示す彼の台詞で章は閉じられている。

我々は『女性の虐待』におけるヒロインたちの苦難を目にしたとき、いまだ残滓を留めているような女性に付きまとう問題の本質と、その解決の困難さに突き当たることになる。だがマライアが娘に書いた“make you endeavour to stifle hopes, which are the buds that naturally unfold themselves during the spring of life!” (127) という言葉もまた、我々読者に希望を与えてくれるウルストンクラフトの教えの一つなのである。

#### Notes

1. 正確には“separation from bed and board” (199) (卓床離婚) である。
2. Mary Jacobus は『女性の虐待』の母から娘への「手紙」と Luce Irigaray の“*And the One Doesn't Stir Without the Other*”の(怒りを含んだ)娘から母への「手紙」とを対置させて、その関係性を考察している。
3. 母や娘の立場からの物語については、Marianne Hirsch, *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism*などを参照。
4. 例えば小説『メアリ』に描かれる母親はこのようなものである。  
After the mother's throes she felt very few sentiments of maternal tenderness: the children were given to nurses, and she played with her dogs... Her children all died in their infancy, except the two first, and she began to grow fond of the son, as he was remarkably handsome. (“Mary, A Fiction” 4)
5. Woman, however, a slave in every situation to prejudice, seldom exerts enlightened maternal affection; for she either neglects her children, or spoils them by improper indulgence... what sympathy does a mother exercise who sends her babe to a nurse, and only takes it from a nurse to send it to a school? (*A Vindication of the Rights of Woman* 151-52)
6. 川津雅江はこれを「母親としての社会的自己の復活」(川津 96)だと論じている。
7. Were women more rationally educated, could they take a more comprehensive view of things ... after marriage [they would] calmly let passion subside into friendship—into that tender intimacy, which is the best refuge from care, yet is built on such pure, still affections, that idle jealousies would not be allowed to disturb the discharge of the sober duties of life, or to engross the thoughts that ought to be otherwise employed. (*A Vindication of the Rights of Woman* 119-20)

#### Works Cited

Hirsch, Marianne. *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism.*

- Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1989.
- Jacobus, Mary. *Reading Women: Essays in Feminist Criticism*. New York: Columbia UP, 1986.
- Johnson, Claudia L., ed. *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “Mary Wollstonecraft’s Novels.” *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. 189-208.
- Tauchert, Ashley. *Mary Wollstonecraft and the Accent of the Feminine*. New York: Palgrave, 2002.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman: An Authoritative Text, Backgrounds, the Wollstonecraft Debate, Criticism*. Ed. Card H. Poston. New York: W. W. Norton, 1988.
- . “Mary, A Fiction.” *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman*. Ed. Gary Kelly. London: Oxford UP, 1976. 1-68.
- . “The Wrongs of Woman: or, Maria.” *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman*. 69-204.
- 安達みち代 『近代フェミニズムの誕生——メアリ・ウルストンクラフト』 京都: 世界思想社, 2002.
- 川津雅江他 『恋愛・結婚・友情——アフラ・ベーンからハリエット・マーティノーまで (1684-1839)——』 東京: 英宝社, 2000.